

序

本書を手にとってくださいました方に、最初に本書のコンセプトについて説明させていただきます。

本書は、いわゆる「皮膚病理学の教科書」ではありません。基本的には標本を目の前にして診断がつかないとき参考にしていただくような本でもありません。皮膚病理学あるいは皮膚病理診断学の初学者に、「cover to cover」(始めから終わりまで)で通読していただき、皮膚病理診断の考え方を感じていただくための本です。そのため、日常診療でよく目にする疾患についてのみ取り上げています。

本書は、大きく分けて3つの部分に分かれています。1つめは、正常組織の見方です(Part 1)。2つめは、炎症性(非腫瘍性)疾患(Part 2, 3)。3つめは腫瘍性疾患(Part 4)についての病理組織診断のポイントです。

正常組織の見方は、多くの教科書でも取り上げられていますが、本書の内容を理解していただくためには是非必要な内容ですので、最初に読んでください。また、疾患の項に読み進んだときにも適宜参照してください。

炎症性(非腫瘍性)疾患については、特に「臨床をみて病理を考え、病理をみて臨床を考える」ということを重視しました。そのため、できるだけ病理所見と臨床症状の対応を明記するようにしました。また、Ackerman先生の提唱されたアルゴリズム診断法を基本に置いた記述をするようにしました。その診断法をさらに深く勉強したい場合には、『Histologic diagnosis of inflammatory skin diseases (A. Bernard Ackerman, et al., eds)』の2nd edition (今はなかなか手に入りませんが)、および3rd editionを参照することを強くお勧めします。また、それぞれの疾患について、どの所見が本質的な所見なのかをわかるように記載するべく努力しました。

腫瘍性疾患に関しては、一般的に皮膚病理学の教科書では、出現する可能性のある所見が羅列されていて、どの所見が診断に本当に必要なのか読み取るのが困難なものも少なくありません。そのため、初学者は診断に迷うことも多かったと思います。本書では、それぞれの腫瘍をしっかりと定義することにより、腫瘍細胞の分化をはじめとして、本質的に何が診断に必要な所見なのかということを中心に記述したつもりです。

以上のことを頭に入れて、この本を読んでみてください。日常よく目にする疾患の病理診断が、どのような思考過程を経てくださるかを少しでも理解していただければ望外の喜びです。また、送られてきた病理報告書をそのまま鵜呑みにしないで、「自分で標本をみる」ことによって、少しでも疾患に対する理解を深めていただ

ければ、この本を制作した意味があるのだと思います。

本書は、今まで私が皮膚病理診断と一緒に学んできた医師を中心に執筆をお願いしました。彼らは、今まで私が皮膚病理診断する上で考えてきたことを常に説明してきた方々であり、私の考えを一番わかってくれている人達だと確信しているからです。一生懸命症例を集め、執筆してくれた彼らの努力無くして本書は完成しませんでした。深く感謝いたします。また、本書を発行する機会を与えてくださった羊土社の鈴木美奈子さんにも深謝したいと思います。

2016年5月

日本医科大学武蔵小杉病院皮膚科
安齋眞一